Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-22

道徳/倫理の人類学の一潮流を素描する ： 物語論と徳倫理派人類学との系譜の重なりについて

酒井，朋子

(Citation)
社会学雑誌,35/36:150-168

(Issue Date)
2019-07-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041986

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041986

道徳／倫理の人類学の一潮流を素描する

――物語論と徳倫理派人類学との系譜の重なりについて――

酒井朋子
神戸大学大学院人文学研究科准教授

一　はじめに

一―一　二〇〇〇年代以降の「道徳／倫理の人類学」

二〇〇〇年代から「道徳／倫理の人類学」が、とくに英米の人類学界において顕著な盛り上がりを見せている。その議論は宗教、経済、医療、ジェンダー／セクシュアリティ、階層とカースト、暴力、社会運動、福祉など、およそあらゆる関心領域にわたっている。

本論文は、「倫理的転回」とも呼ばれるこの状況について、その理論的水脈の一部をスケッチするものである。とくに焦点を当てるのは、行為者中心主義的とも呼べるような、道徳／倫理に対する新しい（あるいは長らく忘れられていた）アプローチを展開する一群の研究である。そしてそれらの研究と物語論との関連性を指摘したい。

冒頭に「道徳／倫理の人類学」の流行は二〇〇〇年代から始まったと記したが、実は人類学は古くから「道徳／倫理」の問題に関わってきた。たとえばマリノフスキの『未開社会の犯罪と慣習』（二〇〇二）[1]のみならず、法人類学は多かれ少なかれ道徳／倫理と関わりを持っている。また、ベネディクトの『菊と刀』（一九六七）[2]における恥の議論が、日本社会固有の道徳／倫理を明らかにしようという試みだったことに異論はないだろう。贈与と返礼の慣習と義務によって構成される社会関係を論じたモース『贈与論』（二〇〇九）[3]の議論も、当然ながら道徳／倫理の主題と深く関わる。贈与は「貸しがある・借りがある」の感情および社会関係と深く結びついている。そして「負い目」や負債の感覚は道徳の根と深く関わっている（ニーチェ一九六四）[4]。実のところ、「道徳／倫理」と関係のないような人類学的主題を見つけること自体が困難でもある。

一―二　道徳／倫理への新しいアプローチ

そうであるとすれば、二〇〇〇年代以降の「道徳／倫理の人類学」の新しさとは何なのか。この潮流を概説あるいは分析する論文や書籍、アンソロジーはすでに多数出版されているが（cf. 神原 二〇一六：三）、そこでしばしば指摘されるポイントを押さえてみよう。

第一に、「道徳あるいは倫理とはそもそも何なのか」が問われるようになった。長年の間、人類学議論において、「倫理」や「道徳」は、それがなんであるかが自明のものとして、しかしはっきりと記述されることのない何かとして扱われてきた。宗教であれ、交換と経済であれ、家族であれ、なんらかの主題を扱うことを通じて間接的に浮かび上がってくる何かとして道徳はイメージされてきたのである。言い換えれば、宗教儀礼、法、結婚の規範、子どもへの接し方などを通じて「見ることができる何か」として道徳／倫理はとらえられてきたのだ（Mattingly & Throop 2018: 477）。この背景にあったのは、社会的なものはすなわち道徳的なものであり、かつそれらは「社会的事実」によって実証的に議論されるべき、とするデュルケーム以来の伝統である（デュルケーム 二〇一八）[5]。しかし、過去二〇年の研究においては、道徳あるいは倫理そのものの定義をめぐって議論が交わされている（Fassin 2014; Lambek 2015; Robbins 2016）。そのために、どのような領域、射程、焦点、方法において道徳／倫理を分析・議論できるのかも、自明ではなくなっている。

第二に、道徳／倫理は人間の自由を考えるにあたって不可欠なものであり、かつ自由と必ずしも対立するようなものではない、という立場の出現である（Laidlaw 2002; 2014; Mattingly 2012）。この立場をとる人類学者の一人、シェリル・マティングリーは、これを従来型の「反自由（unfreedom）としての道徳」に対置して「自由としての道徳」と呼ぶ（Mattingly 2012）。もちろん、道徳／倫理を抑制的に機能する制度や装置と見なし、自由よりはむしろ管理・支配と結びつけて論じる議論（つまり従来の道徳／倫理観に近い方向性である）も、現在なお重ねられている。ただしこれらの方向性も、道徳議論の新展開に刺激を受け、より精査され活発化していると言ってよいだろう。

一―三　物語論との系譜の重なり

さて、これら新しい展開を見せつつある「道徳／倫理の人類学」における論者の中には、一九八〇年代から二〇〇〇年代にかけて、物語論的アプローチをとって研究を行ってきた人類学者たちの名がちらほらうかがえる。まず、先に名が出たマティングリーがその一人である（彼女の研究については本稿後半で詳述）。また、二〇〇七年出版のアーサー・クラインマン著『本当に重要なこと』

(Kleinman 2007) は、不確実性と危機に直面して、それを理解し対処していこうとする「ごく普通の人びと」の「道徳経験」について探求した研究書だが、このクラインマンは、日本語にも翻訳され広い影響力を持った『病いの語り―慢性の病いをめぐる臨床人類学―』(一九九六)[6]の著者である。また、近年、道徳／倫理の人類学を牽引する研究者の一人であるマイケル・ランベックも、記憶研究や物語論に影響を与えてきた論者である (Antze & Lambek 1996)。また前節で見た「自由としての道徳」を論じるジェームズ・レイドロウの近年の著作は、物語論的アプローチをとる道徳哲学に多くの頁を割いてもいる (Laidlaw 2014)。

つまり、「道徳／倫理の人類学」における重要な一潮流が、物語論と系譜において重なるわけである。しかしこのことの意味、限界、可能性についての批判的な検討は、これまでほとんどなされることがなかった。少なくとも国内においてはこの連関そのものがほぼ認識されていない。

では、近年の人類学における道徳／倫理の議論とは、物語論の系譜と、どこにおいて、どのように重なるのだろうか。道徳／倫理に関して重ねられてきた哲学議論が歴史的にきわめて分厚いものであることは承知の上で、本稿では「自由としての道徳／倫理」および「徳倫理」にまつわる人類学の近年の議論に焦点を絞り、そこにおける物語論との関係を素描したい。とくに取り上げるのは、ジェームズ・レイドロウによる二つの著作 "For an anthropology of ethics and freedom" (2002) および *Subject of Virtue* (2014)、またレイドロウの議論で重視された理論の一つであり、一九八〇年代からの物語論の理論的支柱でもあったアラスデア・マッキンタイア『美徳なき時代』(一九九三)[7]、そして物語論に依拠しつつ近年は道徳／倫理に関するエスノグラフィを発表しているシェリル・マティングリーの著作である。

一―四　用語の問題

さて本稿ではずっと「道徳／倫理」という曖昧な言い方を用いてきた。道徳は英語における moral、倫理は ethics の訳語としてほぼ機械的に使用している。この moral (道徳) と ethics (倫理) の差異について、実は研究者間に広く共通した見解を見出すことはできない (Lambek 2015: 17; Fassin 2015: 172)。道徳を無意識のもの、倫理を意識的なものとみなす立場もあれば、道徳は宗教に、倫理は世俗に関連するものとみなす研究者もいる[8]。哲学用語としては、カント的な道徳法則の理論には moral (道徳) の語が、アリストテレス的な倫理実践の理論においては ethics (倫理) の語が使われることも多いためか、そのどちらに自身の基盤を置くかで語を使い分けている論者もいる (Laidlaw 2002; 2014)。

いずれにせよ現在の「倫理的転回」においては、道徳と倫理という語がそれぞれ何をさし、両者の間にどのような違いがあるのかについて、一貫した区別は見られない。従って本稿においても、それぞれの議論の文脈に注意して一部使い分けを行いながらも、全体としては「道徳／倫理」というフレーズを用い続けることを断っておきたい。

なお本来であれば、日本語でそれぞれ異なる歴史的文脈をもつ「道徳」「倫理」の含意についても批判的検討がなされるべきだが、その作業は一個の独立した研究に値するものであり、資料量としても知的作業量としても本稿が扱いうる範囲をはるかに超える。これについては機をあらためて取り組む所存である。

二　義務法則としての道徳観を超えて？

二―一　レイドロウ「倫理と自由の人類学」（二〇〇〇）のインパクト

先に述べたように「道徳／倫理の人類学」に関わる近年の議論は盛り上がりが著しいが、その鏑矢の一つとなったのが二〇〇二年にイギリス・アイルランド人類学会誌に発表されたジェームズ・レイドロウの論文「倫理と自由の人類学」（Laidlaw 2002）である。二〇〇一年のマリノフスキー記念講演[9]を元にしたこの論文は、それまでの人類学における道徳や倫理の扱われ方に真っ向から挑戦する（少々荒削りで）野心的な論考と言える。レイドロウの論文は、その冒頭において「これまで人類学は、倫理の性質について熟考する理論体系を発達させてこなかった」と断言する（ibid: 311）。もちろん多くのすぐれた人類学者が道徳性について言及してきたが、親族や経済や国家について人類学内に研究分野が成立したように道徳が研究分野として設定されることは、まずなかった、というのである。また、人類学と道徳哲学や倫理学との対話もほぼ見られなかった。この第二点目は、学際的研究の必要性が声高に叫ばれる現代において過去の学問状況に与えられがちなレッテルとも見えるが、実はレイドロウの議論においてはそれ以上の意味を持っているように思われる。彼がこの論文以後に行っていこうとするのは、こんにちの道徳／倫理とは人類学的な手法で探求されなければならない（あるいは人類学的な手法を欠いたままでは不完全とある）、という主張だからである。本論文を野心的とするゆえんである。

さてこの論文でレイドロウは、従来の人類学における道徳・倫理の議論のされ方はデュルケーム派社会学の強い影響下にあったとする。それはまずもって価値規範体系としての道徳である。そして、道徳的なものを社会的なものと同定し、客観的な社会的事実の実証的検討を通じて道徳が

論じられるべき、とする議論である。

道徳が「法則」として存在し機能するものだという点については、カントの道徳論においても同じであり、事実、デュルケームの道徳論はその議論の構造においてカントを強く意識している、とレイドロウは述べる。

> カントにとって、われわれが道徳法の命令に従うかどうかという問題は、われわれの意思の自由な活動によっていた。（中略）対照的にデュルケームにとっては、社会の集合性の命令にわれわれが従うかどうかという問題は、それらの集合性がいかによく組織され統合されているか、およびいかにわれわれがその集合性の中に社会化されているかによるのだった。（Laidlaw 2002: 314）

すなわちカントが重要視していた意思の問題が、デュルケームにおいては消失した、というのである。これはカントにおいて人間の意思とその自由が神との関係のなかに成立するものであった一方、神は単に「変貌させられ象徴的に表現された社会」（ibid: 313）であると見なしていたデュルケームにおいては、道徳的な選択と実践に関わる自由意志の問題そのものが「社会的なもの」の議論の中に回収されたから、ということになろう。

ではカントが道徳理論の出発すべき点になるのかというと、そうではない、とレイドロウは書く。そもそもカントは道徳を法則体系として見る理論を確立した人である。近現代の社会において、確かに道徳義務や道徳法則は様々な形で制度化され、われわれの生を形作り影響を与えている。しかし、倫理とは本来「われわれはいかに生きようとするのか」という、より大きな問題に答えようとするものであって、道徳義務はその一部にこそ関わるが、その問題全体に答えうるものでも、それを統率しうるものでもない——倫理学者バーナード・ウィリアムズなどに依拠しながら、レイドロウはそのように論じていく。そして道徳／倫理はニーチェやフーコーの系譜において（も）把握されるべきであり、特にフーコーが最晩年に展開した自己への配慮と自己の技術についての議論の中に、倫理的主体を自由と関連させて論じる可能性が見出せる、とする。

レイドロウは、フーコーが論じたのが「自由を達成することではなく、自由を行うこと」であるのを重視する（Laidlaw 2002: 322）。フーコーは、様々な自己の技術について記述することをもって、人が目的意識とともに自身をある特定の種類の人間としていく手法の多様性を、歴史的に示してみせた。これをもって、倫理的自由というものが、歴史の中でいつも特殊で明確な（かつ当然つねに限定された）形を取ってきたこと、すなわち超歴史的、超文脈的に

存在するものではないことを示した、と論じていく。

ディディエ・ファサンは、レイドロウの論文によって人類学は次のような問いに直面したとする。

> 人間は、社会的に定義された規則や規範に従うがゆえに道徳的に行動するのか。そしてその規則や規範への追従は、教え込まれた行動のルーティン、あるいは制裁に対する内面化された恐怖、もしくは双方の結果として起きるものなのか。あるいは逆に人間は、合理的な判断の結果として、あるいは自己変容しようとする試みの結果として、もしくは両者が分かちがたいものであるがゆえに、道徳的に行動することを決断し、そう動くのか。(Fassin 2014: 429)

そしてレイドロウ自身は、二〇世紀の人類学をその大部分において支配していた流れが前者のみを志向していたことを批判し、自身は明確に、後者の重要性を論じる立場に身をおいたわけである。

これまで見てきたようにレイドロウの道徳／倫理に関する議論は「脱デュルケーム」の議論でもあるわけだが、これについては当然ながら批判もある。たとえばランベックは、近年の「道徳／倫理の人類学」においてデュルケームは矮小化されて論じられがちだとし、デュルケームの道徳観においても、自由や自己超越を論じうると主張する(Lambek 2015: 6)。レイドロウを名指しこそしていないが、意識しての批判であろう。またファサンは、近年の「転回」においてデュルケーム流の道徳理解（および研究方法論）として槍玉にあげられるものは、デュルケームの影響を受けた後の人々の著述と方法論であり、デュルケーム本人の道徳論はもっと複雑で洗練されたものだと論じる（Fassin 2014: 430)。

人類学において道徳／倫理についての議論が分厚く系統だったものとして発展してこなかった責をどれだけデュルケーム個人の著作に帰することができるのかは疑問だが、それはそれとして、今日の社会学や人類学において、道徳が社会からの命令や、社会に対する義務、および個人や組織の社会に対する従属としてもっぱら想定されているのは確かであろう。すなわち秩序、統治、管理、および社会構造と権力関係の維持に深く絡むものとしてイメージされ、時には「抵抗の実践」や「行為主体（エージェンシー）」がそれに対置されるような構図においてイメージされてきたのである。

二―二　マッキンタイアの徳倫理の影響

レイドロウはこののちも道徳／倫理を考察する論文を発表し続け、二〇一四年には単著 *Subject of Virtue*（『徳の主題』

ないし『徳の主体』）を発表する。これは道徳／倫理にまつわる社会・文化理論の発展の可能性として、アリストテレスに起源をたどれる実践倫理、および徳倫理と呼ばれる哲学潮流に目を向けたものであった。

徳倫理（virtue ethics）は、一九七〇年代ごろから英米哲学の中で再評価されはじめた倫理学の一分野で、人間の幸福（エウデモニア）および生の開花の追求を核とする。また、義務論が行為それ自体に着目し、功利主義が行為の結果に重きをおくのに対し、徳倫理は行為者を主題として据える。さらに、人類学との関係で特筆すべき徳倫理の特徴は、それが「正しい行為に共通する一つの特徴、一定のわかりやすい規則として明示できる行為の基準が存在することを認めない」ことにあるだろう（村松 二〇一七：三〇）。すなわち、状況、行為の相手や行為の影響が及ぶ者、それまでの文脈など、その時々の条件によって「正しさ」とは異なるものであり、それらの条件から離れて一般化した形で判断できるようなものではない、というのが徳倫理の立場である。

レイドロウによれば、徳倫理はそもそも人類学と多くの親近性を持っている。徳倫理の立場においては、道徳を理解するためには一つ一つの徳（あるいは徳ならざるもの）の具体的な特徴が詳述されなくてはならない。勇気であれ、弱さであれ、残酷さであれ、寛大さであれ、である。また、これらの語が使用されてきた歴史的経緯や、類義語や、それらの徳がいかなる文脈と社会関係の中で獲得され実践されるのかについても、やはり詳述することが必要となる。クリフォード・ギアツが文化の記述において必要性を論じた「厚さ」（Geertz 1973）とまったく同じ意味で、道徳／倫理の議論においては「道徳的生の形態の厚い記述」が必要になる（Laidlaw 2014: 47）。言い換えれば、ある時、ある状況に置かれた人間がおこなう徳にかかわる行為とは、その状況とその人間の背景を仔細に記述することを通じてはじめて見えてくる。それは、誰にでも・いつでも・どこでも適用されるべき普遍的なルールによって定められる道徳や倫理の対極にあるようなものである。

さて、この『徳の主題』において中心的に検討される著作の一つに、スコットランド出身の哲学者アラスデア・マッキンタイアの『美徳なき時代』（一九九三）がある。これは現代の道徳議論と道徳実践が混沌としたものであることを主張し、徳倫理の実践の必要性について論じた著作である。マッキンタイアは「徳倫理の実践」の重要要素として「物語を生きる」ことの重要性を説いた。そして後に述べていくように、この『美徳なき時代』における物語論こそ、一九八〇年代からの「物語論的転回」において、理論的支柱の一つになったものなのである。

しかし、まずはマッキンタイアの著作の概略を以下に見

てみよう。『美徳なき時代』は、今日における道徳的な言語はすべて意味を失っている、という主張から開始される。それがもともと立脚してそのなかで意味を有していた文脈が、回復不可能なほどに失われてしまったからで、失われた道徳の幻影のわずかな断片を切りはりして作った見せかけの議論が横行しているのが現代である。ゆえに道徳的実践も無秩序なものとなっている。こうした事態をもたらした根源にあるのは、神を破壊し人びとを自律的主体として個人個人へと切り離した啓蒙主義である、という。キルケゴール、カント、ディドロ、ヒューム、アダム・スミスらの道徳法則論は、彼ら自身が想定した人間本性のあり方からさえ著しく乖離しており、それゆえ破綻している、とマッキンタイアは言い切る。それは、人間が「何かになろうとしている存在」であることを見落とし、目的論の視点が欠落したまま、命令体系としての道徳だけを語るのである。

しかし、現代の人間は今も啓蒙主義の影響の濃い人間観のなかを生きている。価値は多様化し、相対化され、揺るぎなき感性や世界観は多くの社会において失われた。個人の権利などの観念も、個人を歴史的・社会的文脈から切り離す恣意的なふるまいの中で用いられ、そのことに対する価値判断のすべも失われており、どの道徳を重視し軽視するかは単なる好みの問題とされている（ちなみに、倫理や道徳は究極的には好みの問題である、とするこのような見方をマッキンタイアは「情緒主義」と呼んで強く批判する）。すなわち「いかに行動し、生きるか」を考える基盤となるべきものが現在は失われているわけだが、そこでマッキンタイアが議論していくのが「物語を生きる」ことの重要性である。

人間行動を理解可能にし、行動や生に目的を与えるためには、必ず物語的文脈の中への位置づけが必要となる、とマッキンタイアは論じる。たとえば、バス停で隣に立っていた青年が突如、「普通の鴨の名はヒストリオニクス・ヒストリオニクスだ」と筆者に向かって語りかけたとする。狂気ゆえの行為かととっさに疑うようなものだが、仮に以下の背景が判明した場合、青年の行為はいずれも理解可能になる。（一）青年は、前日に図書館で彼に鴨の学名について尋ねた人物をなぜか筆者と勘違いしていた（二）青年は内気な性格を打開するため精神療法家に相談し、「見知らぬ人に話しかけろ、内容はなんでもいい」とアドバイスされていた（三）青年はソヴィエト連邦のスパイで、たまたまぴったりのタイミングに居合わせた筆者をエージェントと勘違いして暗号文を伝えてしまった、などなど（同：二五七）。そしてこの例が示すのは、行動はその文脈に即してはじめて理解しうるものになるということであり、それは行為というものが「基本的には歴史的な性格をもっているから」である、と論じられる。

物語という形態が他者の行為を理解するのにふさわしいのは、私たちすべてが自分の人生で物語を生きているからであり、その生きている物語を基にして自分自身の人生を理解するからである。物語は虚構の場合を除けば、語られる前に生きられているのだ。（同：二五九）

人間が「物語を生きる」存在であることに関連して、マッキンタイアが最も重視するのが、アリストテレスのテロスの観念である。これは終着点、目的、あるいは行き着く先、などという意味の言葉である。「人間はある特有な本性をもっている。そしてその本性とは、人間がある種の目標と目的をもつ点、本性によって特有のテロス〔目的〕に向かって運動するという点にある」（同）。このテロスは、時間がたち状況が変わるにつれおのずと変容していくのだが、いずれにせよ人の行動において漠然とであれ常に意識されているものだと論じられる。このテロスという概念とともにマッキンタイアは、「何かである存在」ではなく、「何かになろうとしている存在」であることに、人間存在の本性を見ようとするのである。

この「何かになろう」とする志向性の中に、「善き生を生きる」という物語的な探求（narrative quest）が生まれてくると彼は論じる。では、この「善さ」とはいったい何であるのか。議論の流れから予想されるように、功利主義や理性主義の法則ではありえない。マッキンタイアはアリストテレスの提唱する「中間」（中庸）というものを、特定状況に即した実践と判断の重要性を意味するものと解釈する。たとえば勇気という美徳は無謀と臆病という悪徳の間にあるが、いかなるふるまいが勇気であり、いかなるふるまいが無謀や臆病になるのかは、そのふるまいの文脈に即して判断するしかない。

ところでこの「善さ」とは、実は個人の単位で切り取られた生、心理（そして理性？）の中で定められることはできない。それは人が家族、都市、部族、民族その他の共同体に属し、その伝統の中に生きていることと不可分に結びついている。つまり、ここにおける人生の物語とは、個人の誕生から死までの生の中に閉じられたものではない。自分の人生が生まれ出た、その周囲の様々な文脈を含むものであり、さらには何世代も時代を遡りうる歴史性をも持っている。

ここで「伝統」という語の使用に警戒心を覚える人も多いだろう。近現代の言論文化の中で、伝統重視の態度は多くの場合保守主義と結びついてきたし、格差や権力関係を正当化するものとして機能してもきた。すなわち改革や変容の対極にあるものと捉えられてきたのである。しかしマッキンタイアにおける伝統というのは、けして固着化さ

れて変化しない慣習や儀礼や権力関係ではなく、自分が属する共同体や組織、施設、たとえば大学や医療といったものに関わって「大学とは何であるべきか」「良い医療とは何か」といった絶えざる議論によって形成されるような何かなのである。「伝統とは活力あるときには、抗争 conflict を絶え間なく具現化するものである」（同：二七二）。それはアメリカ合衆国の市民が奴隷制の歴史から、イギリス連合王国の市民が植民地主義の歴史から、「わたし個人の科ではない」と目をそむけるような種類の個人主義に対する批判として出てくるものでもあって、どちらかというと「過去から引き継ぐ責任」とでもいうべき概念である。人間の行動の意味は、常に「自分がいかなる物語の部分であるか」の認識とともに見出され、その物語は未来に向けて開かれているものである。この意味で、マッキンタイアにおける「自己の在り方」とは、歴史の中にある存在として、自身の像と歴史認識の双方をたえず探究的に更新していくようなものである。

マッキンタイアの『美徳なき時代』は、その挑発的な筆致もあって、論争を呼ぶ書物となった。が、レドロウのみならず他の多くの近年の人類学者にとっても、「道徳／倫理の人類学」が参照すべき重要な著書と認識されている。たとえばマイケル・ランベックは、共同体主義の立場を取りながらも伝統を抗争と議論によって構築・維持されるものと見なす点、また個人や集団に複数の伝統を許している点において、マッキンタイアの議論に可能性を見出している（Lambek 2010: 24）。

三　物語論と道徳／倫理の人類学

三―一　物語論へのマッキンタイアの影響

ところで、物語をキーワードとする人文・社会科学研究の発展は、一九八〇年代から本格的に広がった。その萌芽は一九五〇年代から六〇年代に発表されたロシアン・フォルマリズムや構造主義的記号学における小説や民話の物語分析（プロップ[10]一九八七、バルト[11]一九七九）や、社会言語学における物語分析法（Labov & Waletzky 1967）にあったと見ることができよう。さらに、歴史叙述の物語的構築性についての分析を行ったヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』の原著初版は一九七三年で、この前後から今日「物語論的展開」と呼ばれるものが始まったと見ることができる（White 1973）。一九八〇年前後には、解釈学哲学における物語論（リクール一九八七、カーモード一九九九[13]）も発表され、物語理論ははっきりと深化する。社会学や社会心理学における「物語論的展開」の著作群は、これら一九五〇年代から一九八〇年代初頭に重ねられた理論を基盤としていると言ってよく、おもに一九八〇

年代後半から、自己物語論（ブルーナー一九九八[13]; Gergen & Gergen 1988）、質的研究における物語分析アプローチ（Polkinghorne 1988; Riesmann 1993）、集合的記憶の物語要素（Olick & Robbins 1998）など、幅広い分野で展開された。

なお物語とはそもそも何かという問いについて、ここではごく簡単な説明を付すにとどめておくが、すなわちそれは複数の出来事を並べ、その間に関係（因果関係や影響関係）を見出すもののことである。物語は多くの場合、始まり、中間、終わりを有しており、あるプロット（筋、骨組）に沿うよう形成される。物語を悲劇、喜劇、風刺などのジャンルのものとし、何らかのメッセージやテーマを持たせ、また物語に触れるものに感情の揺れ動きを起こさせるのは、いずれもこの「プロット」である[14]。物語論とは、このような物語化を通じた現実認識、すなわち複数の出来事に意味の連関を見出したり、それらを文脈に位置づけるような認識のあり方を重視し、これが過去や歴史の理解、物事の意味の構築、そして人間の自己の構築に根源的に関わっているという立場をとる。

前節で見たマッキンタイアの著作は、実はこの物語への関心の中で理論的な支柱の一つとなったものでもある（e.g. Hinchman & Hinchman 1997; Davenport 2012）。ジェフリー・オリックとジョイス・ロビンズは、集合的記憶研究において頻繁に引用される論文の中で、「物語という概念から独立した形で、あるいはそれを無視して個人的・集団的アイデンティティを説明しようとする試みはすべて失敗する」と言い放つが、これは『美徳なき時代』に依拠しての記述である（Olick and Robbins 1998: 122）。また、イングランドの労働者階級について、その集団意識（集団的自己認識）の形成を物語論的なアプローチで示した歴史社会学者のマーガレット・ソマーズも、自身の理論にもっとも影響を及ぼしたのはアラスデア・マッキンタイアであると書く（Somers 1994: 643）。

マッキンタイアを重視する物語論者は、たとえばバルトやプロップ、ホワイトが行ったように、完成したものとして世に出ている物語の構造分析を行うのではなく、生きた人間が現在進行形でその中を生きている物語認識に注意を向ける傾向にある、と言えるだろう。そこにおける物語は、当然ながら未来に向けて開かれており、一方では行為や価値判断の指針となるが、他方で行為や出来事が重ねられるたびごとに改変され修正されるようなものである。そもそも物語とは、「終わり」が定置されることによって、はじめて「始まり」「中間」の意味そしてその全体主題までもが遡及的に理解されるようなものである（Brockmeier 2001）。そして人間が今生きている物語には、いずれもまだ終わりが到来していないのだ。

冒頭で触れたシェリル・マティングリーは、物語をそのようなものとしてとらえて研究を行ってきた人類学者の一人として挙げられる。そして自身のフィールドを大きくは変えないまま、物語から道徳へと、その議論の中心をシフトさせた研究者でもある。次節ではマティングリーの近年の民族誌『道徳の実験所』を検討し、そこにおいて道徳がいかに扱われているかを概観する。そして物語論的認識世界がいかにして道徳論と結びつきうるのかを見てみたい。

三―二　マッティングリー『道徳の実験所』における生の物語

シェリル・マティングリーはアメリカ合衆国の医療人類学者で、慢性疾患を持つ人びとについての研究を長年行ってきている。一九九〇年代には物語的アプローチをとった臨床人類学の論文を数多く著した（e.g. Mattingly 1994; 1998a; 1998b）。ちなみにアメリカ合衆国内の人種集団間格差と医療に焦点をおいたマティングリーの主題や事例は、社会学研究において取り上げられてもまったく違和感のないものである。マティングリーはアメリカ人類学会大会では二回にわたり、医療の場における物語性について議論するシンポジウムをリンダ・ガロとともに組織し、「治療者や患者が語る物語が、いかに病を取りまく実践と経験の、他の手法では見過ごされがちな局面を照らし出すのか」などの問題を明らかにした（Mattingly & Garro 2000: 5-6）。また、一九九八年の論文においては、長期疾患に苦しむ患者が、どのような治療と生き方を望むのかを自身や他者に説明するためにみずから構成していく語りを分析し、そこに見出されるのはアリストテレス的な実践的合理性に近いものであって、医療の専門的論理によって対処法を理由づけるあり方とは根本的に異なる、と論じている（Mattingly 1998b）。マティングリーの物語論は古典哲学に依拠したものであって、そこにおける関心は物語レトリックによる「表象の政治」の分析ではなく、個々の人間がその生を通じて切りひらいていく物語のあり方と、その物語構成行為のしくみを分析することに向けられていた。そうした問題関心においては、道徳／倫理の主題に取り組み始める以前から、アリストテレスの物語哲学が中核的な理論となっていたことがわかる。

さて二〇〇〇年代半ば以降、マティングリーは道徳／倫理の問題についての研究を多く発表するようになる。大きな業績としては、長期疾患や致死性の病を抱える子どものいるロサンゼルスのアフリカ系家族について書き記した二冊の民族誌がある。以下では、二〇一四年に出版され、道徳の人類学領域における近年の代表的民族誌として言及もされる『道徳の実験所：家族の危機と良き生への苦闘』について見ていきたい（e.g. Das 2015: 95-97; Lambek

2015: 13)。この著作において、マティングリーは自身のスタンスを以下のように述べている。

わたしがこだわるのは、力を奪われた人々の道徳的な投企（project）と良さ（the good）についての信念を真剣に考えるような、一人称的徳倫理に根ざした道徳性の人類学である。[…] わたしは社会集団や社会的カテゴリーよりも個人について語り、経験の再生産性よりもその唯一性について語り、公的な人格についてではなく内的な感情と自己のあり方について語る。わたしは道徳の可能性と、時には革命的な変容についても関心を寄せているが、それらを巨大な歴史的出来事や体制転覆的社会運動の文脈で論じることはほとんどない。むしろわたしが目を向けるのは、日々をなんとかやっていき、手渡されてしまった（たいがい悪い）運（lot）でなんとか間に合わせていこうとする人々の日常生活の素朴な瞬間である。わたしは家族生活のありふれた瞬間を高度にドラマチックなものとしてとらえる。外側からの（中産階級的ともいえる）観点からは異常な出来事と見えるもの（殺人や監禁）を、わたしは日常生活の一部として見つめる（Mattingly 2014: xvii）。

ここで述べられているように、本著作は「一人称的徳倫理」を認識論かつアプローチ法としている。これは三人称的すなわち客観的視点の逆側の極として想定されるもので、その基礎は「行為を一般的な決まりごとの下に組み込むのではなく、意図と結果の観点から行為を考えること」にある。これによって「理由や欲望をもち、それに向かって自分の目的を形作っていくような到達点をもつ一人称的行為者」が想定されうるようになる、とマティングリーは述べる（ibid: 37）。

この「一人称的徳倫理」が、民族誌の中で具体的にどのように論じられていくのか。マッティングリーが記述し分析するエピソードの一つを、やや長めにはなるがみてみよう。

それは、アフリカ系の人びとが多く暮らす、ある貧困地域に暮らす若い女性の家族の事例である。その地域ではギャング・カルチャーが強く、麻薬も多く流通しているが、その家族は過去しばらくは平穏な日々を送っていた。ある日、女性が留守の間に、一歳の息子が熱した油を顔全面にかぶってしまう事故が起きる。男児は一命をとりとめたものの、その顔面は大きく変形してしまった。この取り返しがつかず、かつその後の毎日を決定的に変えてしまう出来事に、家族はどう対処するのか、障害を負った息子と家族がどのような関係を結ぶのかを、マッティングリーは見つ

めていく。

女性はまず、家の中の鏡を全て撤去しようとする。自分の見た目が家族と明らかに異なることを、少しずつ成長する息子が直視せずに済むように、である。もちろん息子のためを思ってのことだったが、うまくいくわけがないと家族に諭される。次に女性は、息子を高い知性と純粋な感性をもつ家族の天使と位置づけ、その像を日々の家族のコミュニケーションの中で定着させようとした。だが女性の母（男児の祖母）は、そんな女性の努力を尻目に、男児が人を揶揄するような軽口ばかり言う「悪ガキ」であることを強調する。女性はそれを好まない。しかし実は、罵倒にも近い軽口を素早くやり取りするコミュニケーションは、アフリカ系アメリカ人コミュニティでは人間関係や自己の居場所の構築のために極めて重要なのだ、とマッティングリーは記す。男児の祖母は、彼が障害を抱えつつその後を生き抜いて行くために重要なのは、純粋さや知能というよりむしろ、一種のコミュニティ文化であるその軽口のコミュニケーション技術であると感じており、その実践能力を伸ばすよう男児をそれとなく導いていたのである。数年後に男児は、親しかった従兄が庭で銃の流れ弾に当たって死亡した、その葬儀の場で、ユーモアに満ちつつも亡くなった従兄への情愛に満ちたスピーチを幼くして行い、周囲をその自立性によって強く印象づけるのである。

ここに言及した例のみならず、『道徳の実験所』は多数の物語的なエピソードに満ちている。しかし、圧倒的な「痛み」「困難」とともにある生を見つめるにあたって、マティングリーが行わんとするのは、ただ物語論を通じて個人の人生の特殊性に注意を向けるよう呼びかけるだけのことではない。彼女が描き出し、提示しようとするのは道徳的苦闘（moral striving）という概念である。それは道徳的制度にあらがう苦闘でも、道徳的理想のための苦闘でもない。いくつもの困難に直面した人間が、状況を切りひらくために既存の自己や価値を脱却・超越するために投げかける「問い」であり、多くの失敗もともなう試行である。上の顔面に傷を負った男児の例でいえば、彼の母と祖母とはいずれも、男児との親密で他に代えがたい関係性の中で、彼に訪れた不幸（そしてそれにまつわる自分の責任）にもがき苦しみながら、彼と自分たち家族にとって「最善」のあり方を模索していった。そうした試行を「道徳的苦闘」であり「道徳的実験」として見るような形で、道徳は論じられなければならない、と彼女は論じるのである。

『道徳の実験所』において示されたのは、ヴィーナ・ダスの言葉を借りれば、道徳あるいは倫理というものが、人びとが継承してきた義務の問題なのではなく（あるいはそれだけの問題ではなく）、「甚大な不確実性と悲嘆に直面した人びとが行う実験なのである」ということであった（Das

2015: 96)。言うなればマッティングリーにとって、道徳／倫理の人類学がおこなおうとするのは、「人間にとって善さとは何か」「善い人間とは何をすべきか」にまつわるテーゼを析出することではない。「よりよく生きようとするとはどういうことか」、「道徳とはそもそも何であるのか」という問いそのものを、「厚い記述」とともに探求していくことなのである。

終わりに

これまで見てきたことをまとめてみよう。二〇世紀の人類学において、道徳そのものを、その定義を含めて論じる理論体系は発達してこなかった。しかし二〇〇〇年代以降、道徳や倫理とは何なのかをめぐって議論が活発化している。また、社会的義務や法則としての道徳、あるいは集団の管理と統治に利するものとしての道徳のみが想定されていた従来の状況とは異なり、近年は行為者自身の理解と企図とを重視し、道徳／倫理にかかわる個別の実践や苦闘を記述しようとする動きが現れている。そして、その後者の立場をとる研究（行為者中心主義的な道徳／倫理の人類学）は、人類学における倫理的転回の起爆剤の一つとなった論文の著者レイドロウをはじめとし、ランベック、マティングリーの手になるものなど、基盤となる人間観や世界観を、物語論のそれと少なくとも一部共有している。この背景には、両者がアリストテレス哲学を下敷きにしていることがある。行為者中心主義的な道徳／倫理の人類学はアリストテレス流の徳倫理（倫理実践）に強い影響を受けている。また物語論、特に過去表象の修辞学・政治学というよりは、進行形の生における意味生成のあり方に関心を寄せる立場の物語論は、その時間経験や人間の生の理解において、アリストテレスの物語哲学に基盤を置いている。

また、一般法則ではなく、個別の状況と文脈における「最善さ」を重視する徳倫理の立場は、文化・社会の理解のためには具体的な状況についての「厚い記述」が必要とみなしてきた人類学と、相性がよい。そして「厚い記述」はそもそも物語的な要素を有していることが多い。物語とは、具体的な場所・時間・人間を描きつつ、普遍性をもちうる主題や主張を「隠された」形で示すものだからである（カーモード 一九九九）。

もちろん、両者には差異もある。一九八〇年代から二〇〇〇年代の物語論において、倫理実践や、目的論的世界観といった主題について批判的検討が行われることはあまりなかった。社会学における多くの物語論の論文は、『美徳なき時代』を引用していても、その道徳論の部分にはほとんど関心を払ってこなかったと言っていい。あるいは乱暴な言い方になるかもしれないが、物語的転回がある種の

限界や弊害（相対主義によるアポリティカルな態度や、ゆきすぎた構築主義により研究が内閉的で自己愛的になっていく傾向など）に直面する一方で、それが拠って立つ認識論的基盤を共有した認識論が、（ごく一部において重なりはするが）おおむね別個の発展をたどり、「道徳／倫理の人類学」における新しい議論となって現在展開されているのだ、とも言える。

徳倫理派人類学のアプローチは興味深いが、その議論に対しては疑問も多い。たとえばその行為者中心主義的なアプローチに影響を与えたマッキンタイアの著作についてである。彼の物語論は、人が目的をもつことによって失っていた自己としての統一性を回復する、ということに向けられているとも読める。が、自己のあり方が統一性を欠いていることは、果たしてそれほど問題含みなのだろうか。生活や人生の私的な領域が社会的に重視されるようになり、「公的な顔」一面のみでは自己を構成できなくなったり、アイデンティティ・ポリティクスが複雑な様相を呈している現代においては、必ずしも首尾一貫性をもたない多層的・多元的な自己という見方は、むしろ現実にも則しており、またそうした自己のありかたゆえに可能な変革のための行動が多くあるようにも思われる。

また共同体主義と物語論が結びついたとき、そこにおいて周辺的で捉えがたい、権威のない者の視点や経験が、捨象、抑圧、忘却されることを本当に防げるのか。物語は意味生成の重要なしくみだが、しかし個人のレベルにおいても集団のレベルにおいても、既存の意味体系に適合しない出来事の側面や解釈を捨象する力はつねに働くのである。

また本稿後半で紹介したマティングリーの研究についても、非常にすぐれた、印象に残る民族誌ではあるが、そこにおけるアプローチは人類学内部においてもメインストリームにはなりにくいとも思える。行為者中心主義的な手法は、行為者当人の置かれた状況と経験を理解するためには、確かにおそらく最善のものである。しかし行為の結果は、周囲や社会に影響を及ぼす。その結果や影響は可視的であることもあるし、不可視のこともある。端的にいえば、誰かが「与えられた条件で最善を尽くした」ことによって、著しい人権侵害や政治暴力、弱者の抹殺が生まれることも十分にありえるし、またその行為が個人の文脈や直接的な人間関係をはるかに超えたところで、集合的な価値観や他者の行動に影響を及ぼすこともありうるということだ。とりわけ紛争のような、イデオロギー、諸勢力の対立構造、私的利害関係が複雑に絡み合った場においてはそうした事態が容易に想定しうる。

村松聡によれば、「徳倫理は、洗練された倫理学的テーゼというより、現代の倫理的問題に答える荒削りな可能性にとどまっている」という（村松二〇一七：四一）。人類

学的に見たときの徳倫理の重要性とは、おそらくマイケル・ランベックが記すように、道徳とともに生きる人間存在について探求するためには経験主義的なアプローチが根本的に不可欠であるという、その主張にある（Lambek 2013: 90）。さらにランベックは、道徳／倫理の人類学は「われわれはいかに生きるべきであり、どのような人間になりたいと願うのか」という問いに関わるものだとも述べている（Lambek 2008: 134）。ナイーブな見解とも言えるだろう。だが、多くの人間の生に「自分はどのような人間になっていくのか、なろうとしているのか」という問いがつきまとっているのは間違いのないことだろう。道徳／倫理の人類学とは、その現実を直視しながら人間や社会が描かれるべきとする立場であると、わたし自身は考える。ただし私見では、徳倫理に影響を受けた道徳／倫理の人類学の意義は、いまだ従来のアプローチに対する補完的なものにとどまっている。

実のところ「倫理的転回」はけして人類学内部に限られたものではない。人類学に先んじて、文学と文芸批評においても倫理に関する議論の盛り上がりが見られている（Eaglestone 2010）。また、経済活動がグローバルに拡大し、かつこれまで金銭的なやりとりの介在しなかった人間生活の諸領域が次々と商品にされていく状況が見られるなか、資本主義の道徳／倫理にまつわる議論も活発化している。道徳／倫理にまつわる人類学における議論も、これら学際的な盛り上がりの中に位置づけられることが必要だろう。

註

（1）原著初版は一九二六年。
（2）原著初版は一九四六年。
（3）原著初版は一九二五年。
（4）原著初版は一八八七年。
（5）原著初版は一八九五年。
（6）原著初版は一九八八年。
（7）原著初版は一九八一年。
（8）たとえば神原ゆうこは、道徳と倫理に関して厳密な区別はなされていないとしながらも、哲学や宗教学のアプローチを取り入れた研究では倫理が、社会秩序ないしローカルな規範と普遍的規範のゆらぎに着目する研究ではモラル／モラリティが注目される、としている（神原二〇一六：四）。
（9）ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスにおいて、当大学で長らく教鞭をとったマリノフスキーを記念し毎年開催される講演会。将来的に人類学全体に大きな貢献をすることが目された若手研究者が講演者として招待される。
（10）原著初版は一九五八年。
（11）原著初版は一九六六年。
（12）原著初版は一九七九年。
（13）原著初版は一九八六年。

（14）物語におけるプロットの重要性については、たとえばリクールの『時間と物語』を参照のこと（リクール 一九八七）。

文献

神原ゆうこ（二〇一六）「公的領域におけるモラリティを文化人類学的に考察するための試論として」『コンタクト・ゾーン』八：二―一四。

カーモード、フランク（一九九九）『秘義の発生―物語の解釈をめぐって』松柏社。

クラインマン、アーサー（一九九六）『病いの語り―慢性の病いをめぐる臨床人類学』江口重幸、上野豪志、五木田紳訳、誠信書房。

ダント、アーサー（一九八九）『物語としての歴史』河本英夫訳、国分社。

デュルケーム、エミール（二〇一八）『社会学的方法の基準』菊谷和宏訳、講談社学術文庫。

ニーチェ、フリードリヒ（一九六四）『道徳の系譜』木場深定訳、岩波文庫。

マッキンタイア、アレスデア（一九九三）『美徳なき時代』篠崎榮訳、みすず書房。

マリノフスキ、ブロニスワフ（二〇〇二）『未開社会における犯罪と慣習』青山道夫訳、新泉社。

村松聡（二〇一七）「徳倫理の現在――その位置づけと現状――」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六二：二七―四三。

モース、マルセル（二〇〇九）『贈与論』吉田禎吾・江川純一訳、ちくま学芸文庫。

バルト、ロラン（一九七九）『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房。

ベネディクト、ルース（一九六七）『菊と刀―日本文化の型―』長谷川松治訳、社会思想社。

プロップ、ウラジーミル（一九八七）『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳、水声社。

リクール、ポール（一九八七）『時間と物語―物語と時間制の循環／歴史と物語』久米博訳、新曜社。

Barthes, Roland (1981) "The discourse of history." Translated by Stephen Bann. *Comparative Criticism* 3, 7-20.

Brockmeier, Jens (2001) "From the end to the beginning: Retrospective teleology in autobiography." Jens Brockmeier and Donal Carbaugh eds. *Narrative and Identity: Study of Autobiography, Self and Culture*, John Benjamins.

Das, Veena (2015) "What does ordinary ethics look like?" Michael Lambec, Veena Das, Didier Fassin and Webb Keane, *Four lectures on ethics: Anthropological perspectives*, HAU Books.

Davenport, John (2012) *Narrative identity, autonomy, and mortality: From Frankfurt and MacIntyre to Kierkegaard*, Routledge.

Eaglestone, Robert (2010) "Ethical criticism." *The encyclopedia of literary and cultural theory, Vol. 2*. Wiley-Blackwell.

Fassin, Didier (2014) "The ethical turn in anthropology: Promises and uncertainties." HAU: *Journal of Ethnographic Theory* 4 (1) : 429-435.

――――, (2015) "Troubled waters: At the confluence of ethics and politics." Michael Lambek, Veena Das, Didier Fassin and Webb Keane, *Four lectures on ethics: Anthropological perspectives*, HAU Books.

Geertz, Clifford (1973) "Thick description: Toward an interpretive theory of culture." *The interpretation of cultures: Selected essays*. New York: Basic Books.

Gergen, Kenneth and Mary Gergen (1988) "Narrative and the self as relationship." *Advances in Experimental Social Psychology* 21: 17-56.

Hinchman, Lewis P. and Sandra K. Hinchman (1997) *Memory, identity, community: The idea of narrative in the human sciences*. State University of New York Press.

Kleinman, Arthur (2008) *What really matters: Living a moral life amidst uncertainty and danger*. Oxford University Press.

Laidlaw, James (2002) "For an anthropology of ethics and freedom." *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 8 (2) : 311-332.

————, (2014) *The subject of virtue: An anthropology of ethics and freedom*. Cambridge University Press.

Lambek, Michael (2008) "Value and virtue." *Anthropological Theory*, 8 (2) : 133-157.

————, (2010) "Introduction." Michael Lambek ed. *Ordinary ethics: Anthropology, language and action*. Fordham University Press.

————, (2015) *The ethical condition: Essays on action, person and value*. University of Chicago Press.

Paul Antze and Michael Lambek eds. (1996) *Tense past: Cultural essays in trauma and memory*. Routledge, 235-254.

Mattingly, Cheryl (1994) "The concept of therapeutic 'emplotment'." *Social Science & Medicine*, 38 (6) : 811-822.

————, (1998a) *Healing dramas and clinical plots: The narrative structure of experience*. Cambridge University Press.

————, (1998b) "In search of the good: Narrative reasoning in clinical practice." *Medical Anthropology Quarterly*. 12 (3) : 273-97.

————, (2012) "Two virtue ethics and the anthropology of morality." *Anthropological Theory* 12 (2) : 161-184.

————, (2016) *Moral laboratories: Family peril and the struggle for a good life*. University of California Press.

Mattingly, Cheryl and Linda Garro (2000) *Narrative and the cultural construction of illness and healing*. University of California Press.

Matthingly, Cheryl and Jason Throop (2018) "The anthropology of ethics and morality." *Annual Review of Anthropology* 47: 475-492.

Olick, Jeffrey K. and Joyce Robbins (1998) "Social memory studies: from "collective memory" to the historical sociology of mnemonic practice." *Annual Review of Sociology* 24: 105-140.

Polkinghorne, Donald. (1988) *Narrative knowing and the human sciences*. State University New York Press.

Riessman, Catherine Kohler (1993) *Narrative analysis*. Sage.

Somers, Margaret R. (1994) "The narrative constitution of identity: a relational and network approach." *Theory and Society* 23: 605-649.